

氏名(本籍)	ふく だ ひろし 福田 弘(茨城県)
学位の種類	博士(教育学)
学位記番号	博乙第1568号
学位授与年月日	平成11年11月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	教育学研究科
学位論文題目	ペスタロッチの教育思想における宗教的基礎 —その形成と展開—
主査	筑波大学教授 博士(教育学) 山内 芳文
副査	筑波大学教授 博士(教育学) 宮寺 晃夫
副査	筑波大学教授 博士(教育学) 大戸 安弘
副査	筑波大学教授 柳本 雄次

### 論文の内容の要旨

本論文は、スイスの生んだ世界的な教育家ペスタロッチ (Johann Heinrich Pestalozzi 1746 - 1827) の教育思想の基礎を成している宗教思想の形成過程ならびにその本質と特徴を明らかにすること、さらにそれと民衆教育との思想的関連を解明することを課題としている。その課題は、(1) ペスタロッチ教育思想全体の根源をなす彼のキリスト教的宗教観の形成過程ならびにその特色を明らかにすること、そして(2) ペスタロッチの生涯の課題としての民衆教育思想との関連で、彼の教育思想の基底をなす宗教思想の特色と意義とを明らかにすることにおいて、論文の内容構成を与えている。

本論文の骨格は、序論、「本論(一) ペスタロッチの宗教観」、「本論(二) ペスタロッチ教育思想の宗教的基底」、結論の四つの部分から成っている。「本論(一) ペスタロッチの宗教観」では、ペスタロッチの宗教観の形成過程が伝記的な先行研究の再検討により説明される。特に聖書からの直接的引用の駆使が特色をなす著作家ペスタロッチの宗教的、精神的形成に果した祖父の決定的な役割が注目され、また学生時代に啓蒙主義者の影響で、ストア主義的徳の実行、宗教的寛容の精神尊重に確信をいだきつつも、「神の摂理」や「魂の不死」への確信、さらに自然宗教による諸宗教の統一という方向はとらずに原始キリスト教的な立場に留まったこと、さらにラファーターらの影響のもとに神秘主義的な宗教的態度で宗教性を深めたこと、そして宗教性を現実世界における勤勉で有効な活動に結びつけた神秘主義者や敬虔主義者への共感と憧憬を深め、生涯を貫く宗教的姿勢の基礎を築いたことなどが注目される。さらに、その主要著作での追跡においては、まず『隠者の夕暮』を基点として、ペスタロッチの信仰観、神観、イエス観が注目される。信仰観については、それを尊厳ある個人としての自立と平安な生活の支柱であると同時に、国家、社会における神と人間との父子関係を基盤とする社会正義の基盤として、また神観については、超越的人格神の思想、神と人類との父子関係という縦軸の上に、人間の同胞関係という横軸を置く基本的構造、神信仰による社会関係、国家関係樹立の可能性への確信として、それぞれ特徴づけられている。イエス観については、通説とは異なって、彼が『夕暮』時代から啓蒙的イエス観とは異なる贖罪論をも含む聖書の見解をもっていたことが明らかにされている。「心情の神」を信じ、具体的な愛の行為の実践によりイエス・キリストの徹底した愛に基づく生き方に倣い従い、信仰を生活の中で実践しようとする敬虔主義的立場、それも啓蒙と共存しつつ、それをもくぐり抜けた後期敬虔主義の立場こそが、ペスタロッチの宗教観の注目されるべきポイントとされている。

本論(二)では、以上のような敬虔主義的な特色をもつペスタロッチの宗教観が、その民衆教育思想の具体的諸相といかなる関連をもつか、「経済的自立援助と宗教」、「法的・倫理的自立援助と宗教」、そして「道徳的自立援助と宗教」などの諸相において検討されている。第一の「経済的自立援助と宗教」では、貧民の自助への援助を救貧事業、その具体的展開としての労働を通しての実践的な知識・技能の育成、読み書き、宗教・道徳教育を内容とする総合技術教育的な構想が、その中心にキリスト教的道徳・宗教教育を位置づけることによって説明されうるものであり、またそれは敬虔主義の隣人愛にもとづいた教育の実践的な展開として位置づけうるものであることが指摘されている。第二の「法的・倫理的自立援助と宗教」では、子殺し犯罪防止という時務的な課題の解決としての刑法改革と教育による民衆の法的・倫理的自立援助思想と宗教観との関連が考察されている。ここでは、特に、理想の賢明な立方者を敬神の指導力をもつキリスト者と規定し、敬虔主義的な実践生活の原理にもとづき、敬神と知的発達との不可分な関係において、民衆教育を現世と来世双方における生活の準備として位置づけていることに注目した。第三の「道徳的自立援助と宗教」については、シュタンツ孤児院における教育実践に含まれる道徳教育論が考察され、メトーデにおける道徳と宗教の内的な関連、道徳的自立と宗教との関係が検討された。ペスタロッチの教育理論を特色づける直観教授の原理についても、それが敬虔主義的な自然観、言語観による規定性についての仮説を提示し、解釈の可能性についての確実な見通しが得られたとされる。最後に「人間的自立援助と宗教」では、ペスタロッチの教育思想を総合的に集大成した作品としての『初期教育に関する書簡』が詳細に検討され、ペスタロッチにおける民衆の人間の自立援助思想の宗教的基底について考察された。ここではペスタロッチの母性愛に関する見解において、人間の霊的・精神的な存在論を検出し、そこにおいてペスタロッチの教育の可能性と限界性についての見解を整理することができた、とされている。

以上の考察を踏まえ、本論文においては、次のような結論が得られた、とされている。(1) ペスタロッチが苦悩と貧困に悩む最下層民衆の教育による人間の解放を生涯の課題にしたことは事実である。人間は自己の人間の完成と人間的幸福の享受に必要な能力や資質の萌芽を天与のものとして備えているとの人間観、能力観を抱く彼は、教育の可能性に大きな期待と確信を寄せたのである。しかし、その可能性への期待と確信の根底においては、神の恩寵に関わる事柄＝人間の究極的救済と、人間的努力で達成可能なこととの識別が介在していた。彼の教育の可能性への信頼には、神の恩寵と人々の信仰覚醒にのみ真の解決策があるとする確信が支配している。この点は、従来の近代教育思想史研究において、十分に解明されてこなかった点である。(2) ペスタロッチの教育思想は、事実として、民衆の人間の自立援助という具体的、現実的な目的を持っていた。その特異性は、近代的＝合理主義的＝人間中心主義的発想による自然や人間や社会に関する観念や認識とは明らかに異なる世界観、人生観に由来する。それは本質的には敬虔主義的な信仰を基軸として、聖書とイエスの教えを実生活のなかで活かそうとするすぐれて実践的なキリスト教的宗教観にもとづいていた。彼が啓蒙合理主義的な学問観、科学観、発達観を有していたことは疑いない。しかし、彼は、同時に、敬虔主義的な宗教観、そして人間観に傾斜している。この重畳性が彼の教育思想を根底的に規定している。(3) ペスタロッチの敬虔主義的宗教観に基づく教育目的論は、永遠の相のもとに人生を位置づける。この目的論は、人間の諸能力を道徳・宗教的側面をかなめとして調和的に発達させることを目指す能力観や発達観とともに、研究史において主流的に位置づけられてきた「近代的で合理的な」要素を維持している。結論的にいうならば、ペスタロッチの「合自然的で合理的な」教授方法は、彼の宗教的基底に支えられてこそ、成立し、展開されえたものであった。ペスタロッチにおける自然はまさに神の創造における神聖なる自然であり、合自然的教授法とは、まさに神の法則に従う合法的な教授法なのであった。

## 審査の結果の要旨

ペスタロッチの教育思想研究史においては、これまで、一部の例外を除いて、その宗教的な基盤への着目は、必ずしも十分なものとはいえなかった。そして、それに論及している先行研究に値する業績にしても、たかだか、ペ

スタロッチの宗教的な基盤の核心が敬虔主義 (Pietismus) にあることを指摘する程度にとどまっていた。本論文の著者は、そのような先行研究の状況を子細に検討したうえで、ペスタロッチの主要著作において、その形成のプロセスを丹念にフォローすることによって、あらためてそれを実証し、さらにその到達点を後期敬虔主義の信仰論と仮説することでペスタロッチ教育理論の主要な原理に対して再解釈を試みているほか、民衆教育論ないしは貧民救済論についても、それを支える人類愛の理念をその信仰論において確認することで、新たな説明を企てている。このようにして、本論文は、ペスタロッチの教育理論研究において、その基盤としての宗教論探しにとどまることなく、ペスタロッチの教育思想そのものの研究史においても新たな展開をなしえたと評価される。その意味で、本論文は、研究の最終成果というよりも、むしろ有力な根拠をもった研究の新たな方向づけとでもいってもよく、著者には、いずれ、それにもとづいたペスタロッチの教育思想の総合的な研究が集成されることが期待される。

よって、著者は博士 (教育学) の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。